

「今、私の晴雨計は！(57)」

「我が思い出の愛唱歌」2

平山征夫

大晦日の国民的行事である“

紅白歌合戦”を今回は全く見なかった。この歳で初めてだが、数年前までは“ワアワア”言っていた二人の娘もこの正月は紅白に無反応だった。私の理由は出場歌手の名前も歌自体も知らないし、聞いても良いと思えないからだ。でも多くの若者は我々がかつてそうだったように紅白で歌われる歌は愛唱歌である。正に「歌は世につれ世は歌につれ」なのだ。だから私がここで自分の一生を振り返りながら「我が思い出の愛唱歌」を書き連ねても、少し年代

が違えば殆ど意味のない記録になる。

その前提で続きを書こう。まず前回挙げておくべきだった童謡が二つある。「月の砂漠」と「荒城の月」だ。前者は何処かエキゾチックな香りがし、後者は日本のな曲の代表で愛唱した。サハラ砂漠でラクダに乗った時には思わず皆で「月の砂漠」を歌った。ただ「先の鞍には王子様 後の鞍にはお姫様」と歌ってハット気付いたら妻のラクダが先にいた。小学校六年の時、学校に新しい放送設備が出来た。昼休みにこの歌を題材にした放送劇を流した。知的障害のあるT君も砂漠の王様の家来の役で出演、廊下をバタバタ走ってくる音を入れてから「王様大

変です」というセリフを何とかこなした。そのことは彼を毎日学校に連れてゆく役割を担っていた私にとっても自分のことのように嬉しかった。「月の沙漠」を歌うとT君を思い出す。「盛旬会」という私の海外旅行仲間と訪れたスペインのアルハンブラ宮殿で、ライトアップされた宮殿を見ながら、男性合唱で「荒城の月」をハモった。不思議と雰囲気はピツタリ、そばにいた外国人旅行者から拍手と共に「何という曲だ。いい歌だ」と褒められた。

愛唱歌の中に幾つか歌謡曲があるが、その代表が三橋美智也の「古城」だ。荒れ果てた古城の哀れさに三橋の美声がぴったりだった。歌謡曲で一番古い記憶は美

空ひばりの実演だ。母校の小学校の体育館での公演だったが、一番後ろから遠くにシルクハットを着た少女を見た。酷い混雑で母に手を引かれていたのを覚えている。岡本敦郎の実演も記憶にあるが、こちらはステージに近かった。「綺麗な声だなあ」とうっとり聞いた記憶が鮮明だ。初めに馴染んだのが「山の彼方に」で、戦後を象徴する大ヒット曲で同じ西条八十作詞、服部良一作曲、藤山一郎歌の「青い山脈」よりこちらが好きだった。いずれも石坂洋二郎の小説の映画の挿入歌だ。「古い嘆きよさようなら」や「古い上着よ飛んで行け」などに戦後の解放された青春が感じられた。石坂洋二郎の明るくて少し色っぽい小

説に高校時代はまっぴらで、受験勉強の合間に「若い人」を夢中で読んだ。第一志望の受験に失敗した一因かもしれない。今、机の脇に石坂作品で未読の「暁の合唱」が置いてあり、読もうか迷っている。藤山一郎の明るい歌声にぴったりの「長崎の鐘」と「ニコライの鐘」も愛唱歌だ。

藤山と対照的で男性的でドラマチックななかに抒情性に溢れた歌声で好きだったのが伊藤久男だ。同郷(福島)の古閑裕而とのコンビは沢山のヒット曲を生んでおり、中高生の頃聞いていた「のど自慢全国大会」の「歌謡曲の部」で一番歌われたのは「イヨマンテの夜」「サロマ湖の歌」「オロチヨンの火祭」など伊藤の持ち

歌だ。大人気ラジオドラマ「君の名は」でも織井茂子と伊藤久男がいくつか挿入歌を歌っていて、子供ながら「君の名はと たずねし人あり」と歌っていた。普段なら「そんな大人の歌を歌うんじゃない」と叱る母も一緒に歌っていた。伊藤の歌の中で私が一番歌っていたのが「ひめゆりの塔」だ。

沖繩戦の悲劇を歌ったもので「・・・米須の浜の月影に 濡れて淋しき石の塚 母呼ぶ声のとこしえに 流れて悲しひめゆりの花」の歌詞を歌う時はいつも涙が出そうになる。もう一人同じ頃愛唱したのが若山彰で、「喜びも悲しみも幾年月」は大ヒットしたが、それもさること「惜春鳥」が好きだった。若山の甘い声には伊

藤と違った抒情性があった。愛唱した歌謡曲の中で、古いけれど洒落た一連の歌がある。戦前から戦後にかけて作られた「和製タンゴ」と言われるものだ。松島詩子の「マロニエの木陰」は昭和12年の曲だが、今聞いても古さを感じない。「或る雨の午後」(デ

イツクミネ)や「夢去りぬ」(霧島昇)なども戦前だ。あの戦争に突入してゆく少し前、時代に抗議するように作られたタンゴのリズムに乗ったおしやれな歌だ。それは戦後服部良一を中心に一挙に花を咲かせた。「赤い靴のタンゴ」「別れのタンゴ」「懐かしのタンゴ」などで、少年だった私は町内にあったダンスホールから流れてくるタンゴのリズムを憧れを

もって聴いていた。タンゴブームはさらに「さよならルンバ」「君忘れじのブルース」「別れのブルース」「夜のプラットフォーム」などの新しいリズムの名曲を生み、そして藤浦洸、高木東六のコンビは「水色のワルツ」を紡ぎ出した。

この流れで愛唱した歌に「黒いパイプ」がある。出だしの「君に貰ったこのパイプ 昼の休みに窓辺によれば」の歌詞が気に入っていた。でもこれは和製タンゴの系列の歌ではない。戦後昭和21年から37年までNHKラジオが毎週一曲、戦後の国民生活に元気を与えようと歌を提供し続けた「ラジオ歌謡」から生まれたものだ。ここからは沢山の愛唱歌が生

まれた。「朝は何処から来るだろう…」で始まる「朝は何処からは戦後を象徴した。ついで「雪の降る町を」「山の煙」「あざみの歌」「さくら貝の歌」「山小舎の灯」「アカシアの花」「白い花の咲く頃」「リラの花咲く頃」など枚挙に暇がない。この殆どは今でも賠償千恵子などの歌手が「日本の抒情歌」として歌っている。叙情歌とも書くこのジャンルの定義は曖昧でCDなどには「抒情歌、童謡、愛唱歌」などと書かれたものもあるが、私にとっては愛唱歌があって、その中の重要な部分を占めるのが抒情歌だ。この後も私がこのジャンルに入れる愛唱歌が続いて生まれた。「匂い優しい白百合の・・・」で始まる「北上夜曲」が

その代表だ。この歌ははじめは歌声喫茶だと思うが、昭和30年代次第に広まっていった。作者不詳と言われていたこの曲が、実は戦前昭和16年、水沢農学校の菊地規作詞、八戸中学生安藤睦夫作曲であることが、両者の名乗りで判明したエピソードも当時話題となった。戦時下直前のあの時代にこんな甘美な歌が学生コンビで作られていたのに驚かされる。この歌がきっかけのように、「山の娘ロザリア」「北帰行」「もずが枯れ木で」「母さんの歌」「惜別の歌」「琵琶湖周航の歌」などが次々私の愛唱歌に加わった。それは多感だった私の青春時代前半を彩ってくれた歌だった。

(平成31年2月27日)

